

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
生体機能補完医学講座
医師・医学博士 **狭間 研至**

第5回 次なる一手は予測した未来から逆算する

“地域包括ケア”とはいうけれど…
薬局のあり方を変えるのは難しい!?

地域包括ケアとは、超高齢社会を迎えたわが国で、国民皆保険制度を基本としたわが国の社会保障制度が、今後も永く続くようにすることも念頭に置いて、広く国民に示された概念だと考えています。

高齢者の尊厳を守り、自立生活を支援し、住み慣れた場所で最期まで過ごすという考え方そのものは、筋の通ったものであり、納得されている方も多いのではないかと思います。しかしそうすると、今の薬局のあり方や、薬剤師の働き方は変わらなくてはならないはずだ、とも感じられます。

また昨今、厚生労働省から発信される情報のみならず、日本薬剤師会が示す薬局の将来像も、現在の「調剤薬局」という枠組みではないものになる、というように読み取れますし、薬学教育が6年制に移行して、薬剤師のあり方も今までとは変化しなくてはならないということも理解できるのではないのでしょうか。

私自身も、この数年間、外来患者さんの処方箋を応需して、それらを迅速・正確に調剤し、解りやすい服薬指導とともにお薬をお渡しするという薬局の機能や、薬剤師の職能もきっと変わっていくだろう、と申し上げてきました。

しかし、現在の業務の仕組み、収益構造、薬剤師と他の職種、とくに医師との関係等が頭によぎると、「そうはいうものの、現状を変えるのはなかなか難しい」と感じておられる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

地域包括ケアのイメージから逆算し
薬局と薬剤師が変わることが大切

「地域包括ケア」時代を現す1つの指標として「在宅死亡率」というものがありますが、現在の12%から徐々に上昇させ、とりあえず40%まで高めましょ

うという目標が掲げられています。過去の歴史を振り返ると、この目標は、今現在では少しハードルが高いように感じられませんか？

しかし、医薬分業の黎明期やジェネリック医薬品の普及当初のことを思い出せば、あの頃に、分業率が67%を超え、ジェネリック医薬品の使用促進が80%を目標とされるようになった今日は、到底、思い浮かべられなかったのではないかと思います。どんな分野でも時代は変わるはずで、以前当たり前だったことが当たり前でなくなり、またその逆も起こるのです。

とはいうものの、にわかには信じがたい。そんなときには、少し業界全体を時代の経過とともに、マクロ的な視点から読み解くことが大切だと感じています。

医薬分業も、後発医薬品促進も、かくかくしかじかという理由でこうあるべきだ！という全体像が示され、それを実現するならば…と時間を逆戻しして現在を観察し、次なる一手を考えるとというようにして進んできたのです。

そのためには、未来を正確に予測して、逆算的に物事をとらえ、現状を見てみる必要があります。

最も精度が高い未来予測因子の1つが、人口動態であることを考えてみれば、少子化と高齢化が同時進行しているわが国で、来たるべき未来はほぼ確実にやってきます。現状

にとらわれすぎず、薬局や薬剤師が「地域包括ケア」を支えるために示されている種々のイメージから逆算し、今の薬局を変え、薬剤師が変えようと考えることが大切だと思います。

